



卷之二

全  
才  
曲  
声  
人  
編

里見八犬傳第十八輯

上快五冊

西漢書上拾

丁子辰年正月廿五



毛利家文書  
南總里見八大傳第八輯卷之四上套

東都 曲亭主人編次

第八回 残丸を斬る毛野莊介と戦ふ

復説馬加羅六郎御武ハ落葉の刀を引提て発児を立出で鎌倉寛見ようち  
對上勢ハ唐衣か花の塞見ハソテ駆引け吐嗟と叫ぶ左右も若黨奴隸が手を  
拿へ頂て抗て動せど登時御武声高すよや花乞巧奴今ゆよ叫び方と云許  
えや然とお故ゆく汝ノ首を刎まわむ先や末期の引遣する説不そぞ听候  
抑懷父這両刀ハ小猿落葉と命せる事クシム重宝ハ就中落葉の刀ハ  
鏡也ト莫邪又異きモ。あると人を斬る所に時々必ず四下る木葉忽地零る  
事。因て落葉と命せら。壁言ハ故官領家井氏主の名刀耳。是村兩丸と相似焉。

理の打合槌の胸を苦に簾倉寢児の戦ひる膝をもて權且息を吹き亀や  
項を藉鶴の眼と睇り左見右見て刀祢連らと喘せりる宣下趣を身より奪て理  
を知らむ已ニ一切をろみか。為生と活物朝より生れて冬死す雖す命へ惜みよ。  
乞ううそ殺さるを教ふゆゑ死や身の野曝の家ゆく足の跋すもハ腫む苦  
れが樂えむ。あれが世の常情を日毎手携る竹杖あり午載の鑿あて義に夜暮  
寝宿る松陰ゆ萬代までありうる。然知るを誇白は薄情や貞であるをと思ふ  
被けむおそれの刀の奇特を試えども命を取る過ゆ死して千歳を歷さん  
うち生よ一ト日が復り。とりとあるてつらぎ。这里よ往還の人を俟つ右や左の袖乞で  
望いかぬ刃の内を御法捨ハ御首用へ宗旨違通を多とひそめ敢モ御武の眼と  
瞪。声苛立す。這奴甚大胆へ屠所の羊とね。命を惜めがとく助けよ。乞  
えゆゑと觀念せよ。と罵る。豊室も亦冷笑ひ。憾ま。因果を嘯めても。序悟しゆ

考  
オヨ賞期  
極やんの急

思ひをせう。と云ふ。  
思ひの本性當言ふ。驢耳彈琴。益るに回答。時もや。寝てん快々鉗へ。といふ。も慌ち  
鎌倉寢覗ひ。も近着く御武を椎禁め。危と睨へ。刀持達徳まで陪詫すう。も  
聽ひも。是非も。今。何を隠す。兎某も是事の果。年來冤家。數々と外見隠す  
世と膺ぶ假り乞ひと知らず。悔り。怪我り。あんまき。本意を遂す。て。未だ。怒も  
免れ。刀持们と數々果え。あらゆど。好す。かぬ。克。されど。手を免れ。ま。脱り路る。誘ひ敵  
て。手を免れ。免れ。と。駕。驚く御武。豈。實。伴當。而。よ。氣味。安。く。の。懷。す。よ。と放ち。し。  
然れど。御武。也。阿答。を。已。免。免。ひ。を。ね。が。警。警。ま。ぞ。い。よ。声。を。立。て。却。噛。た  
た。誘。へ。す。真。の。仇。討。を。ん。ま。鎌。網。龍。襲。衣。刀。劍。武。器。准。備。の。あ。づ。な。余。る。東。西。を。貲  
蓄。坐。の。慢。語。脱。て。便。直。で。あ。ん。を。も。つ。ひ。も。又。近。着。と。鎌。倉。寢。覗。る。肩。引。せ。と。身。邊。出  
立。つ。え。お。と。御。武。の。曾。前。近。く。衝。着。す。高。い。山。阪。長。権。す。息。杖。息。が。飛。ま  
命。の。建。場。ま。と。其。首。を。御。贈。せ。よ。と。され。て。伶。行。く。御。武。ハ。然。も。目。聟。の。階。下。を。回。て。魏

あつまひ。よきうみをすのとく。る。  
やく苦笑ひ。丁田主亦内せ命取を悲しむ。這奴ハ心乱せん。乞の枝葉相交に似而非  
俳優。すあらどや。といへば豊室すうち笑ひ。足へ蹴ても口ぞり。現朝膀胱のふる。勿論世  
ふハ蹇足児の仇撲。悲人敵討をどよ。故車を存すあらも。這奴が寃家ハ甚麼見る。  
ぞ君、火の睡言。欲妻敵欲。その精曲也。んづふぞや。と向ふを蹇足見へえ。ス。ミル。モ  
貴石の一株。某がきの年未だて。空夢と所在を索す。寃家ハ親の睡言。すゆ。モ又妻  
敵ある。おどと。是金。寃家。親。寃家。と追出す。親類の内。塞。竹馬のあひえ  
各。ど三世と。翠。空城。一夜の夢。柳巻。おも。錢。されば。俺。其首。路絕。死。轍。や  
熟。坡。よそ。蜂。吹。れ。成。果。も。皆。是。金。の。所。為。る。れ。い。そ。那。奴。環。會。て。便。這  
悉。と。復。毛。と。よ。の。運。微。オ。す。貧。鏹。一。人の。面。訪。一。か。芝。小。屋。菟。布。寐。の。夢  
な。ふ。打。と。金。闘。技。の。ま。提。れ。す。世。遇。人。や。か。手。よ。蹇。足。見。す。ら。れ。す。月。日。の  
照。一。の。夜。形。不。常。體。ま。へ。よ。嘲。と。口。説。を。听。を。御。其。足。踏。鳴。焦。躁。す。り。措。ば

れて旅宿の更支苦を解けたり。刃はあらわゆる。敷ひとも愛ふべからず。と只官感を空  
す。御武荒合とて、大刀を洗淨めく。又前路を急ぐべと左馬左右と見  
えり。一個の女衆がひらひらして茶店の檐下より桶の水を引提て水桶を扶ひよど  
みます。さうもひきよどみます。おまへとおまへとおまへとおまへとおまへと

れて旅宿の夏支苦て解けたり刃せぬ者をあひ數ひても多うと只官感考室  
賓は御武豈冗余とも笑ふまゝ刃を洗淨めしる處又前路を急ぐべと夜マ左右とえ  
れり一個の奴家あらゆく茶店の檐下は汲桶尽も水桶の水を引提て走るを快事よと  
御武が出来ての夏寒見冰と洗す卷向。奴隸うきし合ひ抗そ鋸際ち刀大さく  
流一又被まがせん懷摺摺若鳶黒う験て刃て抜んと自鼻氣出で五六枚累々修  
推摺うと伸しくゆるよ折うけ。余程は相模小猿子り久く樹蘆は駆ひく辯の始末と  
廻窺を。いまほゞうああえのめだ。うろのう。うろのう。ひちる。ひちる。  
御と御武よ近着て刃を引根一右の手と握りて無躊躇の舉動そひひうたう免の俱不  
果う御武豈実免かとぞうと併當面あらば。遂連り主従齊一うち目感と  
えくのせぬ相摸小猿子の腰よ被うと木枝を左より合ひて兩三度抜く刃を熟視す。又が  
繫ル一の折より失せと傳す。落葉小猿の両刀を身より帶え花が冤家の餘類

の姓名を既知る馬かとも名告ひ。又那篠山家連、由家の子であつて、逆臣  
大起常政の親族もあり、是寛家の半集又幸免の仇である。金權  
鬼の不幸伴れ、要廢れまし。知らず田某に助劍做焉、捐資す。小倅為  
葉の兩刀を返す。但は刃を受て、罵誇る。少年の力も形狀り、宴會にもヨリ勢に接ぬ  
膽勇廣。吉名告へ、志士の隨一。大阪毛野亂智が浮世を潛り、假毛鬼。这里は先  
月、御州名古、苟且の相模、猿子と嘆へても果敢き身を銃死す。終の裡、新  
撫る鎌倉寢児の似而非様、樂乎亦仰ぐもあらず。然く御重実此役遂  
められ。御武の憚れで、せせらぎ高音。原来這奴は、年輩才子化す。  
俺が先代の親子、徒類ふうねく。擊すも果て、走る大阪毛野で、ありはよ。海舟が人を知る。  
六かのをすまつて、ハ士の隨一。さそり、大人ご怒う。あ義子、草の間通の間  
只那笠山逸東太縁連まつて、轟す。おとづれば、いと、裏く御重実此役遂  
轟天道。今は、今まも、おとづれば、お思報となる。や、潔親の東西、(お)造名刀ふ心と

かく俺们まことに、罵る。但非廣。言へ夏虫の火虫等々を斬る白徒丸。出で  
又一層の是家東表と獲る。星裏、海と共佑石廣城で逃る。大田小文吾、慘順、近属  
御路は流落の足見歎の如き。同恩大川甚介と俱は首を刎られ。今ま首  
級と這両刀を片見歎うち賜り、武藏へ還る。路りて、故分首と相添ひ。俺が先代を  
復とは私の幸の事。石廣殿の奉公も回と起も出門の大功御感も八入す  
増やんや。其首を退と。敦固や合まれ。腕て振断す。首と斬る。是が左より  
方より豊室も恨み。刀を引抜く。手を研んと構へ。登時毛野の紫雲騒びぞ。  
御武は不吉ニセサ。内を刃の下で、鳩鳥の如く翔潜る。筆標を以する修業の  
剽撲瞬く。周囲に籠ぐ。刀矢を左へ流す。推止。刀と丁と拵合す。怯むと透至。研と  
研る。矢は、御武が首へた。地を落す。軀も確と仆け。是よ倍も少年の勇氣  
奮く。豊室も、お惜いや。とぞうの逃走もさへ。おとづれば、伴當進むと喰ふ。推合せ

んと主従四々方接連する刃の電光競ひ意をよみせざり毛野へ左方と後流し前後不  
當る奮撃り突戦零時もあくをも一個の奴隸をそらまどんと研伏せり返毛刀は若薑の  
扇は深痕の血の龍通端苦とび一反から走り仆と自斃す。伴當二名撃  
れ一矢豊実は心慌て失脚狂危矢躬の受大刀毛野の元毛刀の元毛刀の元毛刀  
風よともべるや毛野が豊実慄へ毛野をも。小髪毛野を研らせて嗟哀とぞう一聲叫びて逃  
そ。か。いぬき。うらのこ。ひめ。まゆ。おもひ。つげの。やまとひら。つげの。毛野  
妻と腕ふと趕ふ大阪の後ふ勝る一個の奴隸が轟えまき刃の光よ毛野へスモも  
身と沉まく左へ外を至妙の挣た小鳥と机む若鷹の勢ひ當りかけられ奴隸  
身と打落れく痛癡を負ひぬ。邊さけ。傍りて程よ莊介ハ小文吾と共に信濃路投げりと云ふ。あ  
丁田兩東使の跡と趕ひ夜を日よ縫く信濃路投げりと云ふ。這折獨逸速  
く諏訪の湖水の頭まく毛野前面と見一旦せり毛鬼とがく。年づ血刀引提て  
鶴立毛野僻者毛野と云ふ。毛野と云ふ。毛野と云ふ。毛野と云ふ。毛野と云ふ。毛  
毛野と云ふ。毛野と云ふ。毛野と云ふ。毛野と云ふ。毛野と云ふ。毛野と云ふ。毛野と云ふ。毛

野の奴隸と趕捨て又農夫と趕さず。よ往方も知るをあり。又外より那奴隸を。  
ひとう。漏さず。轟きばと。又いそぎの益や。あと獨語。單衣の檢折返す。刃の鮮血と三  
箇も漏さず。轟きばと。又いそぎの益や。あと獨語。單衣の檢折返す。刃の鮮血と三  
遍推す。ひ道より鞆を答ふ。手を効り。御武の屍體を抜く。小篠の刀を拔く。  
左肩右見。落葉の刀。苦腰。跨。懃然と大田がる。こそぞ歎嘆息の外。う  
志を絶。よひへ。先獨進す。領れて小塘促の方。よやくとせよ。紹介透を。後  
方。走。裏つ。刀の瑠璃を握り留め。引戻せ。毛野へ引じて。伶竹ぐ足。又踏固  
や。足。些の躊躇。冷笑ひ。又え。汗。汗。馬加門。伴當。外。ゆ  
ま。冥土の伴の願。もよ命と指す。生を欲と向。せり果。そ。莊外へ。哭。と。喜  
意氣過。する舞者。俺も馬加丁。田門を趕。这里。よまて。されば。おもて。勢。舉動  
まのもの。えんか。のまよ。今那主從三名と。奪果。よまの。こ。争。う。俺  
う。を。と。奪取り。よ。あ。是人を殺す。不義の利。餉。ら。山巒。おも。遠莫敷。荒。者。の。縛

忍と復すあむを時宜よ儘しての両刀を俺よ返さが許しもせん然もお頬を安置て  
ひ勒の出世すあまそわ口ひやが去せん快返セと罵り又引よまとも野内りと振る  
面と對一乞と疾視て原来淨も要ある奴ら年齢と推計よ俺が忍敵すをども。  
こうすまう 1 つまう  
這両刀をうち知く心せかづ。那親族欲あらもとも身の介際とわからく慢五年  
ひ受てもやうと數度。晃りと引抜く落葉の名刀真窟臨す。轍す。刃交と莊介  
ゑ。刀の鍔よ受く被此身で反そ程ゆゑ。せど又轍す大刀と復引外。拔合て一上  
一下とみて盡と勇士と勇士の烈れに大刀响下々轍と委ミ。うく受く流を灑の糸風の  
桿。三日月の左右。紊れて狂へ。も亂ど。參。武術の精妙二龍雲間よ鬪ふ。時兩金  
鱗。零玉。和く兩虎深谷。草鞋を身。と。草鞋を身。と。庄介。後れて寺。諏訪。湖の頭。まぐ。身廻ふ  
小文吾。路次草鞋を身。と。草鞋を身。と。庄介。後れて寺。諏訪。湖の頭。まぐ。身廻ふ  
あれ。誰。知。庄介。の。縣。人。手。と。戦。既。廩。小文吾。走。景。駿。



大川莊介主代仕と喧嘩を勇士でひがや綾巻のありとも俺面を顧て怒と共に刃を  
ぬめひひかと諭へ草あら又せねかようち對ひて嘆大川生這少半いゆ比具よ和殿小  
報知る孝烈之雙文の大坂生元情由へ知らむと筆ひと止みと和睦あるひ惱ら  
後悔わんぞと諭せん莊介野頭て原来這少半り知殿嘆ふ夕秀す大坂生あり  
はよ。傍せよ怒りそれとも這人東使主役を名三人まく數み果て俺重兵の面刃  
奪取つ小塘隄のえへ走去んとつ折甘木料らど這里よ来て那為体と廻窺た  
玉が刀と他もあ渡さずとるよ心の惱りのこ素あう知殿よ由縁る。大坂生であつて神  
きぬ身の知るうもるく一舉よ雌雄を決せんとく先よ挑戦ひれ危うりと主陪勢ひる  
毛野へ疑ひ解を嘯大田生。やと東ノ脇は這人の名玉人面を詔す見れば又是知殿の  
義兄。弟源のぬあんとひもかと争ひ。初て推せん刀の所以のこ小篠落葉の両  
手。原是千葉家の重宝きりと備文の數れ折削児ありと奪すをうとける  
刀。原是千葉家の重宝きりと備文の數れ折削児ありと奪すをうとける

寺も久しくありぬ。余るよけりも石讀る。千葉殿の家臣と見え。馬加螺六郎御武と名告れる。這兩  
刀を帶てまゝ相伴ひ。大様。大石の家臣。下田畠五郎豊実。と。の。手。の。事。の。手。の。事。の。手。の。事。  
櫛木付。牌。身。知。夜。懲。而。御。武。豈。實。耶。首。茶。店。憩。折。那。鄉。武。義。語。久。這  
落葉の刀。而。人。研。四。下。木。落。奇。特。人。の。ひ。鉤。そ。誘。そ。  
駄。而。這。頭。而。鎌。倉。寢。児。喚。做。乞。正。の。て。り。伴。告。田。引。身。斬。垂。葉。遊。戲。  
更。不。有。危。忌。憚。ぎ。那。仰。舉。動。某。初。樹。薦。立。え。光。景。立。す。垣。走。生。矢。庭。よ  
御。武。主。使。三。畜。ま。だ。轟。果。く。う。是。不。慮。鎌。倉。寢。児。仇。舞。は。仰。え。也。豈。き。し。  
御。武。則。馬。加。常。威。せ。田。迹。う。と。あ。く。ひ。克。は。れ。ハ。俺。親。弟。兄。の。寢。家。の。餘。類。多。の。あ。ざ。  
虚。室。知。ね。ど。大。田。生。の。首。級。齋。し。た。る。と。ひ。誇。り。と。あれ。豊。寢。く。よ。込。下。と。そ。既。ふ  
痛。癆。と。眉。せ。よ。一。個。奴。隸。共。侶。那。故。へ。年。逃。亡。願。す。這。個。兩。刀。原。千。葉。殿。の。重  
宝。す。と。富。ナ。他。の。あ。よ。う。游。我。の。御。所。城。へ。ま。わ。を。と。く。俺。父。使。節。奉。り。ま。る。路。次



莊介は返せり。今番の厄は片貝か。又這刀を没官せられて那假首領と共宿（かのをくひ）。小文吾が刀をえ石濱大塚両所の使者よ遞されやうとすえく。稻戸津衛（いなみ）が好意（よし）。死を免れ（まぬ）。疫艾穴鑿（よあいのあな）。異刃を贈られと跨ぎ那裏を潛生（せうせい）。又山庄略と云云。と辯短く夏見示せん。毛野の口に脣歎賞（えんさう）。宣足は東西を離合あり。刀と主と凶吉（ゆきよ）。禍福は別れ。あふ意外の奇談感。まよ身飾（まよみの）。然まよ傳來（つまうき）。今退度を移（い）。もまほら。馬加常盛。苗積（なえ）。立て手葉殿（てのはただい）。又這兩刀を返さる。咱们親子の忠信を義（ぎ）。あるべくもあらず。況當日這兩刀を毛野家籠山塚連（らんざん）が穴鑿取りてふやへらばあらと。でも那所在を知るよ。あらう。へとを願ふ。今ち大體生這義を輕々言ふ。刀を將軍へねと連う。毛野めく已ぞれば莊介をかく。承引（うけいん）。候まく厚く諭すを受む。やうやつを。ねと。えをか。知ぬのよ似たれ。今かよ固辞（こじ）。諭す後ひまんぐ。和君が亦何ぞ。又身の猶患（ゆかん）。かと。とづな。とづる。おう。おうか。寳家を索る年來の準備（じゅび）。ふく。空室不と向れ。毛野の莞奈を棄て。おまえも心安（いたずら）。

ゑぢらつと かひ いまき りきく こぢご  
あまく 沢竹の後を趕る。今まめ。大田小文吾を知ら。やと名告。豊実の説  
ゑく。身を起して刀を抜んとて。と抜ても果て頭と鹽敷を落して件の刀より復し。  
易事。神先の娘を手刀と屍骸の直邊よ送つて更に走り。大川よ趕着ゆきのこりと  
犬坂生よ再會。やう。件の豊実御武僧の辯の趣具よ知りぬ。是のへとす。複なる刀を  
二大よ示す。毛野の跡を笑坪よ入る。うち中す。莊介の感をと大ききと。刀を  
折く。通微妙に計ひき。某と家臣の刀を犬坂生する。う。津衛の刀ハ御武の  
屍骸の邊へ送つて。えん。舊よ那人よ別々折猶俺の兩刀の再合全を。手が追換刃裏  
便よ就く。返す。まかん。と。ひつよ。要る。東西を何時も留ん。是の亦御武。屍骸の直邊よ送  
指ハ那萩野井。冷す。抗て。越路へ。そぞり。あん。縱そ。交は及。を。季松桂。徐國の君の  
夏の劍と。す。ふ。情深。ひ。霜戸。ま。火致。そ。然。かと。軒て。件の三刀で引挽て。そぞり  
起。も野を復す。かまく。ゼ。小文吾。や。と。喚葉。醜。豊実。よ。往還の跡。絶え。時移

蟹井物語  
西行風



小文吾路數子豊實  
こうごみちよ

さう



時が茶店の主人へ名前長は寝うたん余ら衆人聚ひて且荻野井の後は今ま  
まゝ人又逃亡する伴當へ和君を認り、あるはんは慢々那里へゆき危し和君は这里を立  
ちて甲斐のままで、すれり大川と渠を立て面を隠して其頭を過る旅客の如く又  
ア那両刀を送り猪口と銜着ん。這着をあらゆる。とりへ又莊介も大田の意見  
あり。もと捕らへて要り快走退す俺们と程よ路等の冷は深き血と  
巻隱してやよ目各られりると諭とふ毛野へ推辞難く慙しがれが先続そへて  
甲斐のまえ約八十町の内をす幹淨丸等せん那里は赴くよとも便で近く近づき快  
便え。ひひと心と附れ居らき毛野の豪末芭引提立別れいや諭訪の湖や上  
引返す。ひひとと心と附れ居らき毛野の豪末芭引提立別れいや諭訪の湖や上  
つ社を伏拜と遙よ禱る。又榜の枝に袂よ風戦ぐ樹立涼しに青  
天の下すらす。またござ。まとあらゆ。おう。まぐらむき。  
桺の驛路役そのをだけ余程よせせ小文書の御武幻の敷れる鳥道と雲霧時徘徊して  
緯の動靜と覗くよ村長をどぞ見ぬの。まご一箇も聚ひまを程遠く里人と。

路の走違ひ罵謔とうちやく茶店の翁が食をて稍かす未  
ゆ打御武主役の在元の嚴を初めてるとおれが胆を潰し引返す。先帝  
縛の趣を祝歎よ告宣えども終走たりとまゝ這里へ諫訪の神領て  
るをまゝあまき。ち  
神職の宿所へ近くよりぬ程ゑば其首うち人のつやざ柰ど茶店の主人も  
有るところがより倍々便りようす。暮暮の携たる那両刀と潛す御武の尻嚴の  
裏透へ送り掛け退ひく。又小文吾は甚くや。俺们假首領の匿六穴ハ  
做る小賊の頭顱ゑが惜むべくのうねども俺う姓名を冒され。鼻首やまき  
てあが一時の權あせよ快くぬ所めり心裏恥れどもと之が小文吾點  
頭。さう見えか亦某の藤ふくよ樹りて伴の首領御武の鎧櫛よ和置くと  
行すまくやれり引手一湖水よ論りて走が送根みよび。や上快をひあくや  
幕介零時と推移す。首領を奪ふ易れども然ぐれ萩野井三郎の難を

及くものやあん那三郎へひまく見えまど。あ所がりて後れうとも竟ま寄りをも  
あら那身は笛害あせてお情深か由元の恩と仇も復まよ候思念を極め  
件の首級こめい小瓶は氣き酒しゅ漫まん鑑櫃かんぱい手て指さし候まつ笛笛音おと  
を玉髄ぎょくが是三郎の越度こしゆすきを知し矣星者ぎじやうの比ひれが頭顱とうろくが程ほど度たど廟廟廟廟裏うら  
かくすかくすさんあめえひらごと見せみせ小文五右ごう下げ含笑かんしようの淺寔みあさは奇き妙めう余よが人の聚食  
経けいよふをもも誘いざなふとおつ又また共とも信しん舊きう所ところ起おきてて俳ひ俳ひ當とう茶ぢゃ店てんの邊へに  
措そなへ御武ごぶと豊実とよみ鑑櫃かんぱいと箇筆きばしの蔭いんへおへどと推翻すいはんと兩箇ふたごの小瓶こめいで出だ  
本毛ほんもう毛け草くさ鞋くつ足あし輕あわく空から稿こうと具量ぐりょうを退しりぞて大阪おおさか毛野けの約束やくの甲斐かい路じ獲か妻め既すでにて先時さるとき  
前面まへの國くに家いえ樹じゅの下した蔭いん毛野けの八や久く候まつす恰繼かつき小文吉ごう仰あめめをそそぐ走はし生なま板いたすをも

那里の首尾おひを始はじねね登の時とき小文吉ごう莊じょう合あハ那忍なしの勤靜きんじやう首級こめいのの箇様こじやうと  
逃のれの代しろより真ま報ほうと傳つたへ今いま那醜なくじるおおひ逃のれの限かぎりり智君ちくんのの人ひとも俺わ們わ青  
來くわ此こ彼かれと親おや近ちかとも駄だくく向むかへへととも見みゆゆの今宵いま宵の旅舍りょくしやをを盡つくべべ。誘いざな共  
侶わのの偏へん導しゅ不ふ毛野けのをを知しひひ。後あと限かぎ先まへ立たく俱ともよよて二里ふたさと青  
柳さやの驛驛よよれれ晴はれ時ときおおををああよよ。猶よ也やかかかかと送おまま及及び。  
き驛路驛路をを客き店てんをを宿しゆくとと夜よをを行ゆ。詰つ今いま兩頭りょうとう余よ程ほど秋あき野の井い三郎さんらうのの青  
豐とよ宇う御ご武ぶよよ熟じれれとと氣き未み明めいよよ件くだんの兩東使りょうとうしの旅舍りょくしやとと知しすす千せん刻ときああ後  
化かかか心こころ頻ひん焦あわ櫛くしのの伴ばん當とう们めんとと快か趣しゆ善ぜんとと欲のぞせせかかの日ひ殊こと小こ暑ひ  
かかれれ主お備そなへ疲つか勞られれそそすす事ごひひもも日ひ景けい斜かたよよりり比ひ洗馬せんま塩尻しおじりとと過く。教諭きょうじゆの  
湖こ程ほど遠とおくく及およ小松原こまつはらまますす折おり之のれれ路じ傍わ夏草なつくさの警けい戒かい下さ。仆くわのの族ぞく人ひと方かた俄お野の井い三郎さんらうのの近ちかく隨つづき地じ頭とうとと抬たげげすすよよ見みの人ひとよよ賀がりりと

嗚うだり當下荻野井主役へ訴り取ら立たる。熟視れり別人をもる。御武の  
奴隸や。鑑櫃と擔荷ひ方似況介と喧做との腰下に血を金り。行歩不休  
ええか。三郎酷く驚いた。みづちの故を同すは似見介才より身を起して主君の御武  
さて。上を下のうちも。それと。おこるる。之を。おも。それを。おも。おも。おも。おも。  
僧小丁田殿兵四保は諭訪の湖の頭ある茶店より妻時憩ひ。折落葉の方を弄び。  
ことく。小塘隣の下より段寒足を覗き。鉄軒より。ある。折薪十七入。一個の乞食が走り出る。僧  
東人を振り矢庭よりを拠取て生れ。若者黒三千足丁田の奴隸と皆繋がれ  
生れ。程在下す。かくの如く左の膝を破れ。うなへもうちざれ。後れて。善る傍輩より。善  
とひひ。幸い。引外して逃げ。這里まことに。よし。と痛癪の苦痛。腰脳。と。付どく  
且く黑白で覗ぞ。すゑ。俺より。今うち。些一先の程馬加丁田兩箇の伴當。若黨奴隸  
八名。後れて。善く。連ま。折ゆ。這里を過り。からぬ。遠く。嗚近着。けく。那大意を告

知せ身の介抱を憑う。など。大家騒譟ぐの。主の先途。不後。よ左右も。言音不  
居れ。ごそり。身。勧め。湖水のを。直走。よ走り。一人も。かす。も。召す。往還稀な  
る。暮。身。よ。知る。人。身。命。果敢。よ。ぢ。あ。れ。拯。せ。か。い。ぐ。と。苦。ま。ふ  
口説。三郎。え。う。听。く。駆。宋。と。伴。當。田。て。達。く。そ。そ。り。と。傳。黒。妻。と。す。か。と。零  
時。も。猶。豫。を。く。じ。俺。那。里。へ。狀。事。件。の。名。子。と。檢。索。せん。若。们。二。酒。呑。這。似。見  
介。と。肩。よ。被。て。推。續。ひ。と。跡。う。ま。よ。痛。疾。き。と。父。所。よ。零。想。死。ぬ。と。し。  
よ。の。花。音。方。ふ。  
よ。這。が。東。人。の。不。覺。の。枉。元。の。證。据。ふ。食。の。肴。よ。勦。れ。と。吟。叫。飛。び。休。  
走。去。れ。一。園。の。サ。キ。青。黒。鞋。奴。空。よ。身。よ。送。し。よ。餘。の。併。よ。後。れ。ど。と。喘。ぐ。と。  
走。す。ほ。信。而。荻。野。井。三。郎。御。武。们。が。數。れ。る。茶。店。の。邊。よ。ま。よ。既。す。地。方。の  
役。人。諭。訪。の。祝。の。家。臣。某。て。深。澤。の。村。長。下。諭。方。の。驛。長。と。此。彼。と。來。會。と。驛。の  
詮。議。區。と。深。澤。の。茶。店。の。主。と。御。武。豊。実。の。伴。當。の。後。化。と。這。里。よ。ま。よ。み。那。裏。

末と實向せず。茶店の主人が農夫を折り、山田の耕作と園宅の男を暇で怠らす。  
東より權且店をうち空す。夕飯さる退く。の間にあれが辯の始末を尋ねとひき  
又徳成豊実の伴當仰り東入殊更路次を急ぐ。捷徑あり走れ。名を大く後化ふ。  
の路違ひて遅速あるの故に辯過江を適纏。这里よりまかれて仇を詰る。よしむわざ。  
迷宮の如のみと云ふ。そこへひとくえ。陳家の一箇を詮人ある。てゐる。茶店を頭と數十歩。  
あきと角りて一個の男子の洞軒をせむ。あ。這所爲能とぞ。又豊実を首に挙  
げ。ここと距きと五六町。田畠み死嚴のあと。地方のめぐらす。住むが一人の  
所為。あもぞ。三五うり。照駆。見れ。豊実の亡嚴を則。这里へ。むかへ。手て只願  
う。そぞ。そぞ。のふか。そぞ。かがる。まく。ばき。のかわら。とう。衆談を察と折り。長尾家の副使。秋野井三郎が來る。かう。那般見介の口状を  
告る。爰で衆人の疑心。初解。畢竟萩野井三郎が祝の家臣。對面して相計ふ趣  
いふ。さう。又這下の卷を解分ると。聽ねか。

里見八犬傳第八輯卷之四上巻

終

天保三壬辰年

春正月二十八日稿了

芸化堂

筆

福硯齋

大吉利

市